

赤十字 NEWS

http://www.jrc.or.jp

DECEMBER 2018

NO.943

12

平成30年12月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第943号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

海外と
助けあ
うにと
あろう



難民を受け入れるパレスチナの病院で
医療技術支援を行う日赤の看護師

世界中で苦しんでいる人のために、力になりたい――。

「NHK 海外たすけあい」キャンペーンでは、日本赤十字社とNHKが協力して日本の皆さまの「想い」を、世界155の国と地域の、支援を必要としている人々へ届けてきました。

1983年の開始以来、これまでにいただいたご寄付は累計約251億円に上ります。

多発する自然災害や、宗教や民族の対立による紛争などによって

世界のあちこちに助けを求める声があふれています。

赤十字は世界中に笑顔を咲かせようと、さまざまな支援活動を行っています。

NHK 海外たすけあい | 12.1(Sat)~25(Tue)

CONTENTS

FEATURE__2・3

難民の
命と健康を
守る

SPECIAL TOPICS__4

赤十字の、ひと [川口真由美]

TOPICS__5

原子力災害救護訓練レポート

ドキドキ体験 みんなのボランティア
[裁縫ボランティア]

AREA NEWS__6・7

埼玉 / 熊本 / 千葉 / 京都 / 山梨 / 静岡 /
茨城 / 秋田 / 群馬 / 北海道 / 岩手 / 東京

健康豆知識「アルコール依存症」

WORLD NEWS__8

インドネシア・スラウェシ島地震
現地医療チームと回る被災地

1枚の写真から



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
TEL: 03-3438-1311
一部 20円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

難民の命と健康を守る

NHK 海外たすけあい

紛争などで祖国を追われ、帰る場所がない難民が6850万※人います。劣悪な衛生環境で病気に苦しんだり、医療体制が十分でないことも。難民をとり巻く状況が少しでも改善されることを目指し、日赤は現地で支援を続けています。 ※2018年6月 UNHCR 発表



imagine!
あなたなら
どうする?

もしも、あなたが
難民として
水道もトイレも
ない場所で
暮らすことになったら…

REFUGEE SUPPORT FOR PALESTINE
WASH 水衛生支援事業 × シリア難民

難民の子どもの背後に見えるのが彼らの生活に欠かせない水タンク。日赤が支援する非公認居住地では、トイレと水タンクなどの給水設備が各世帯に提供される

シリア難民の健康と尊厳のため 清潔な暮らしの支援を続ける

紛争勃発から7年が経過した現在も、140万人以上のシリア・パレスチナ難民がレバノン各地で生活しています。中でも「非公認居住地」でのテント生活を余儀なくされている難民は飲料水や生活のための清潔な水の不足、衛生面でのリスクに直面しており、日赤はレバノン赤十字社とWASH(水衛生支援事業)を



不衛生な環境に慣れ、ハエが顔に数匹止まっても、気にも留めない少年

展開し、改善を図っています。

生活水をためておける水タンクの提供、そして排泄物を屋外で放置せず衛生的に管理するためにトイレも設置。また要望が多かった、衛生的な生活習慣のための勉強会もレバノン赤十字社のボランティアが定期的を実施しています。「子どもの健康が第一。子どものために大切な知識をしっかりと聞いて実践するわ」と2人の子を持つお母さん。「ここでの暮らしは決して裕福ではないけれど、精神的に安心して生活できる」とも語ってくれました。シリア難民が健康的で尊厳のある暮らしを営むための支援を続けています。



日赤の設置した水タンクは1000リットルの貯水ができる(写真上)。穴を掘って囲いを付けたトイレが設置された(写真下)



imagine!
あなたなら
どうする?

風邪をひいても
お腹が痛くても
薬ももらえない
環境だとしたら…

REFUGEE SUPPORT FOR PALESTINE
医療技術支援 × **パレスチナ難民**

ハイファ病院では医療サービスの質の向上を目指し、日赤職員による講義も定期的に行われた

難民を受け入れる病院を支援するため 現地医療スタッフに寄り添った指導

70年前、第一次中東戦争の勃発により周辺国に逃れたパレスチナの人々。レバノンで難民として暮らす彼らの中には、避難先のシリアからも逃れ、二重難民となった者も。彼らは「無国籍者」として未来を築けないまま生活しています。彼らの難民キャンプはインフラも整備されず、垂れ下がるむき出しの電線に感電する事故が絶えないなど、極めて劣悪な環境。そんなキャンプで難民たちの命綱となっているのが「ハイファ病院」。人手も機材も不足する同病院に日赤は医療技術支援を行っています。技術指導者として支援に参加する日赤の藤田好美看護師は「救急の患者が搬送されてきた時、現地の医療スタッフに適切な処置を指導しながら救急措置を行い、無事一人の命を救うことができました。現地スタッフが『私たちの措置で命を救ったの!』と興奮して周りに伝えていました。うれしかったですね」と語りました。



現地の医療人からも頼られる存在となった関塚美穂看護師(写真左)、救急外来診療録の改善で視覚的にわかりやすくなり、記録に費やす時間が短縮された(写真右上)、日赤の支援終了後も継続的に取り組めるよう現地スタッフ同士で研修会を実施(写真右下)



日赤がレバノンで行っている、シリア・パレスチナ難民への支援の様子を動画でご覧いただけます。

動画はこちら→



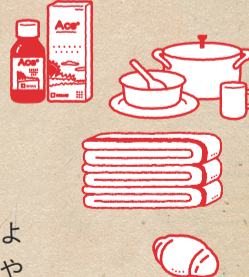
Webで寄付! 「Donashop」サイト

水や毛布、医療品などの避難民に必要な物資が並び、買物をするように寄付(ドネーション)ができるお店(ショップ)で避難民の生活や暮らしに、想いを馳せてみてください。★12月25日まで公開!

詳細は、日赤のホームページへ

日本赤十字社 ドネーション

検索



赤十字
の、ひと

no.002

福岡赤十字病院 川口真由美看護師(バングラデシュ南部避難民 保健医療支援派遣)

「3人で抱き合って泣いた。それが希望を支える“伴走”の終着点でした」

ミ ヤンマーからバングラデシュ南部に逃げてきた避難民夫婦、アブドゥルさんとロヒーマさんのことを私はきっと忘れないでしょう。夫のアブドゥルさんが初めて日赤の診療所に来たとき、その足は組織が腐って悪臭を放っていました。病院でも見放された末期がん。人に担がれ、家から30分以上かけて診療所に来るのは耐えられないほどの激痛があるはず。私は、日赤チームのリーダーや仲間に、訪問看護をしたいのだけれど…と相談しました。診療所は毎日4時間で150人の患者を受け入れています。赤十字の使命はより多くの人を公平に救うこと。しかし彼の苦しみを見過ごすことはできない。皆の協力で週1〜2回、訪問看護ができることになりました。

何度目かの訪問の際、暗い表情で奥さんのロヒーマさんが語りかけてきました。「少しも良くならないのはなぜ?」。私は返す言葉が出てきませんでした。アブドゥルさんの家族には、もう彼を助ける手立てがないと伝えられずにいたのです。通訳やバングラデシュスタッフから「彼らには希望だけが支えなんだ」と告知を止められていました。じっと私を見つめていたロヒーマさんは、重い沈黙を打ち消すように「お金がなくて病院に行けない。そんな中あなたたちが来てくれた。それだけでとても感謝している…シュクリア(ありがとう)!」とほほ笑み、去る私たちを見えなくなるまで見送ってくれました。

アブドゥルさんをなんとか助けられないか、あらゆる方面に確認しましたが、打つ手はありませんでした。痛みを抑える強力な鎮痛薬も処方してあげられず、訪問しても、ただガーゼと包帯を替え、血圧や脈拍を測るだけ。これが救援の限界? 難民の限界? 人を救えない人道支援なんて……。



ロヒーマさん(写真左端)と川口看護師(写真中央)と、6人の子どもたち。竹の骨組みを防水シートで覆っただけの彼らの住居にて

川口真由美 看護師
福岡赤十字病院 手術室勤務

福岡赤十字看護専門学校を卒業後、福岡赤十字病院に入職。インドネシア津波災害やネパール地震など7回の海外救援派遣を経験する。バングラデシュ南部避難民支援には平成30年7月から10月までの3カ月間、従事した。

助けたいという思いがあふれているのに、たった一人を助けられない。訪問看護をし、アブドゥルさんと家族が感謝の言葉を口にするたび、悔しさと葛藤で、私の心は重くなりました。

彼 らとの出会いから1カ月半。訪問10回目。避難民キャンプ内の待ち合わせ場所で、約束の時間を過ぎても、迎えが現れません。迷路のようなキャンプの中を、記憶を頼りに、彼らの家に向かいました。小高い丘を越え、この谷を下って登ったら、という場所まで来て、家からロヒーマさんが顔を出し、私たちを見て何かを叫びました。通訳が「3日前に亡くなったって」。その言葉を聞いた瞬間、私は家を目掛けて駆け上がり、ロヒーマさんを抱き寄せていました。彼女は私の腕の中で大きな声で泣き出しました。家の中から13歳の長女が顔を出し、目が合いました。「おいで!」私が腕を広げると、長女も駆け寄り、私たちは3人でお互いを抱きしめながら、大声で泣き続けました。その帰り道も、彼らから私に向けられた信頼のまなざし、何度も何度も言われた「シュクリア!」という言葉が思い浮かび、涙が乾くことはありませんでした。

川口真由美ナースってどんな人?



松永由紀子

看護部長
福岡赤十字病院

上司

バングラへの派遣要員の募集が出たとき、誰よりも使命感の強い川口さんは、直ちに活動したいと強く思ったはず。質の高いスキルと場を盛り上げる人柄で、勤務している手術室でも不可欠な人材です。小学生(青少年赤十字)の時から培った赤十字「愛」のDNAは人を動かす力をもっています。



川瀬佐知子

看護師
大阪赤十字病院

派遣先同僚

現地スタッフは最初アブドゥルさんの傷の悪臭や状態にひるんで、処置を拒んでいました。「医療資材がもったいない」とも。「私がやる」と川口さんが彼らに代わり、資材を無駄遣いしないよう工夫しながら処置をしました。川口さんの患者への思いと行動を見て、周りが変わっていきました。



久保晴敬

派遣要員
日本赤十字社 本社

派遣先同僚

日赤の診療所で働く現地の医師、看護師は、今年12月末までの雇用契約でした。しかし全員が、日赤チームでもっと学びたい、契約を延長したいと申し出てくれました。患者さんと真摯(しんし)に向き合う川口さんの姿に感銘を受けたようです。川口さんの周りにはいつも人が集まっていた。



アブドゥルさん(写真右)の足の処置の方法をロヒーマさん(写真中央)に指導する川口看護師(写真左)

赤十字
の、ひと
concept

赤十字の活動は「ひと」がつくる。赤十字らしい「ひと」、赤十字活動を頑張る「ひと」を、「赤十字の、ひと」として紹介します。(不定期掲載)

TOPICS

「原子力災害が発生！」救護訓練レポート

2018年11月4日 於:茨城県水戸市



原子力災害拠点病院に指定されている赤十字病院の医師らが治療と除染の流れを確認※

自然災害の救護活動と同様に 原子力災害でも万全の備えを

原子力事業所で火災が発生、放射性物質が放出され、周辺地域に避難指示が出された事故を想定し、災害救護訓練が行われました。参加したのは1都9県(福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・神奈川・新潟・山梨)の日本赤十字社の医師・看護師・放射線技師・支部職員と、日本原子

力研究開発機構(JAEA)や消防など約300人。避難所に集まってきた地域住民役を日赤のボランティアが担い、放射線への不安と緊張が高まった状況を想定した「避難所救護訓練」や、被ばく者の治療や除染を行う「緊急被ばく医療処置訓練」などを実施。自然災害と同様に原子力災害においても救護活動を行う、日赤救護員のスキル向上と、防災関係機関との連携強化を図ることが、この訓練の狙いです。



放射線技師は線量計を手に相談に応じた



“こころのケア”に重点が置かれた訓練となった

参加者から高い評価 “こころのケア”訓練

「避難所救護訓練」では、JAEAと保健所の職員が被災住民の放射線汚染の確認(スクリーニング)を行うところから始まり、日赤医師による問診のほか、不安な住民に寄り添う“こころのケア”活動や放射線技師によるアドバイスを実施。被災者役のボランティアからは「本当に被災者になったようなリアルな訓練。こういう訓練はいざという時のために日本でやるべきだと思う」という声や、

“こころのケア”を受けた方たちからは「話を聞きながら背中をさすってくれる手が温かく、涙が出そうになった」「看護師の対応が素晴らしかった。こころのケアがこんなにありがたいものだったとは…」といった声が聞かれました。

訓練終了後、日赤医療センターの丸山嘉一国内医療救援部長は「放射性物質は、聞こえない・見えない・匂いもしない。しかし知識があれば対応できる。参加した支部・施設は訓練の成果を持ち帰り、万一の備えにしてほしい」と語りました。

※放射線汚染のある被災者は、原子力災害拠点病院(①)及び原子力災害医療協力機関(②)などが受け入れ、処置を行う。自治体により①②に指定された日赤支部・病院は全国に21ある。なお、避難所で活動する赤十字の救護班は、それ以外の被災者に救護活動を行う。

ドキドキ体験! みんなのボランティア vol.6

* 裁縫ボランティア *

in 日赤大阪府支部 裁縫室



裁縫に自信がなくても大丈夫。初心者はズボンのゴム入れから体験。

手編みニット帽

よだれかけ

裏地にもこだわったひざかけ



クリスマスには...

ありがとうございます

大切にしているのは着心地の良さ! 縫い目にまで気を配ります。

施設の子ども・お年寄りへ 心のこもった手作りプレゼント

今回は裁縫ボランティア体験です。よだれかけ、パジャマ、ひざ掛けなど、乳児院、高齢者福祉施設などが必要としている品物を、手際よく作っていきます。生地調達から、縫製、きれいにアイロンがけして梱包するまで、笑い声の絶えない部屋で、ボランティアが一丸となって作業。まったく乱れない縫い目は、使う人の着心地、使い心地にこだわった証しです。ボランティアの皆さんは年に一度、クリスマスの前に品物を届けに行くときに出会う子どもやお年寄りたちの喜ぶ顔を想像して頑張るそうです。次々と完成する品に、温かさや優しさが縫い込まれていると感じました。

お住まいの地域の窓口はウェブサイトでもご案内

jrc.or.jp/volunteer/search/



※ボランティアの活動内容や受け入れ状況は地域によって異なります。詳細は日赤支部にお問い合わせください。

こんにちは。40代の主婦、あいかとうこ 赤井十子です!子育てがいち段落してできた時間を活用して、困っている人や地域の役に立つ方法を探しています。



AREA NEWS

全国各地、あなたの生活のすぐそばで、日本赤十字社の活動は行われています。

埼玉県 熊本県

赤十字を楽しみながら知る！子どもたちも大興奮のフェスティバル

「みんなの赤十字フェス2018in深谷」と「赤十字フェスタ2018inくまもと」が埼玉県と熊本県でそれぞれ10月に開催されました。埼玉では県内の赤十字奉仕団員など約250人が運営するさまざまなブースで、一般来場者が心肺蘇生法やジャンボ防災カルタなどを体験。熊本でも県内4施設が合同で防災学習や模擬献血、医療体験の展示など約30種類のブースを設置し、約5800人の来場者でにぎわいました。



埼玉(左)・熊本(右)の両会場とも子どもから大人まで幅広い世代が参加！

千葉県 京都府

いざという時の対応力を高める！日赤xDMAT(緊急災害医療チーム)の研修・訓練

日赤は、DMATの研修・訓練に積極的に取り組んでいます。千葉県支部は、約140人で実施された千葉県主催の地域DMAT養成研修の会場となり、研修の運営に参画することで、災害医療に臨む病院・消防などとの連携を強化。京都府支部では職員と京都第一赤十字病院、京都第二赤十字病院のDMATが、鉄道会社主催の列車脱線事故を想定した訓練に参加し、負傷者への実践的な対応力を高めました。



県内DMATが集結(左・千葉)、警察・消防とも連携(右・京都)

秋田県 群馬県

70年続く奉仕団、誕生間もない奉仕団 同志を持って地域貢献

創立70周年を迎えた秋田市赤十字奉仕団は、10月28日、周年記念事業として「つなげよう！知って安心 防災知識」と題する公開講座を開催しました。一方、群馬県ではみどり市東町赤十字奉仕団が誕生し、11月1日に結団式を執り行いました。経験豊かな「70歳」の奉仕団と、生まれたばかりの「0歳」の奉仕団、どちらも赤十字の精神を胸に、同じ志を持って地域に貢献する活動を続けていきます。



秋田(左)と群馬(右)、熱い奉仕精神は地域も時代も超えていく

北海道

看護専門学校「1年生」が戴帽式 看護師としての使命を再確認

11月2日、北海道の伊達赤十字看護専門学校で戴帽式が執り行われました。この式典は、入学から半年後の1年生を対象に、赤十字看護師の使命を再確認し、意識を高めてもらう目的で開催しています。参加した学生たちは「ナイチンゲール誓詞」を唱和し、看護の道を歩む決意を新たにしました。また、道内の浦河赤十字看護専門学校でも10月19日に同様の戴帽式が行われました。



ろうそくがともる中、女子はキャップ、男子はバッジを手にした

常任理事会開催報告

平成30年11月27日、本社において平成30年度第7回の常任理事会が開催されました。

- 1 理事会に付議する事項について (日本赤十字社監事事務室および監査委員事務室規則の制定) (葛飾赤十字産院にかかる資金の借入) 審議の結果、理事会に付議する事項については、原案のとおり同日開催の理事会に付議することが了承されました。 また、長野赤十字看護専門学校の閉校、平成30年度上半期における各事業の進捗および予算の補正にかかる10月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

理事会開催報告

平成30年11月27日、本社において平成30年度2回目の理事会が開催されました。

- 1 規則の制定について (日本赤十字社監事事務室および監査委員事務室規則)
- 2 資金の借入について (葛飾赤十字産院) 審議の結果、規則の制定および資金の借入については原案のとおり議決されました。 また、平成30年度上半期における各事業の進捗等について、報告しました。

山梨県 静岡県

人を救うのは技術と心を鍛えた「人」だ～赤十字奉仕団が救急法イベントを開催

赤十字救急法などのスキルを磨くイベントが赤十字奉仕団によって実施されました。日赤山梨県支部の「奉仕団員等災害救護訓練」は今年で40回目を迎え、4日間で延べ460人が訓練に臨みました。また、静岡県では支部の奉仕団の運営により「第8回赤十字救急法競技会」が開催され、公募した選手253人を含む総勢544人が参加。両会場とも、事故や災害時に傷病者を救うための技術を高め合いました。



真剣勝負の緊張感が漂う「三角巾8つ折り競技」の様子(静岡)

茨城県

“寄付”はどんなふう役に立つ？寄付の意義をワークショップで実感

日赤茨城県支部は10月8日、青少年赤十字活動に取り組み高校生38人を対象に「寄付の教室」を開催しました。日本ファンドレイジング協会とコラボしたワークショップで、寄付を通じて社会貢献を考える内容です。次代を担う青少年赤十字メンバーを対象にした開催は全国初。高校生たちは社会的課題や赤十字活動、寄付を募るアイデアを考えるグループワークで熱心に意見を交わし合いました。



「支援先は自分の価値観で選ぶことが大切」と参加生徒

秋田県

「今日からここは僕だけの特等席」アートで広がる里親制度

「里親月間」の10月、秋田赤十字乳児院は「里親制度普及啓発ポスター展」を秋田公立美術大学と共同で開催。ポスターデザインも、「今日からここは僕だけの特等席」「歩き方がそっくり」などのキャッチコピーも、すべて学生の制作。見る者の胸を打つ展示となりました。これらのPRの成果もあり、前年比15人増の24人が里親の研修に申し込むなど、期待以上の関心呼びました。



全31作のポスター展示(左)、最優秀に選ばれた作品(右)

群馬県 岩手県 東京都 熊本県

使命を胸に、決意新たな“赤十字大会” 熊本県では「くまモン」もステージに！

10月下旬から11月上旬にかけ、各地で赤十字大会が開催。日赤群馬県支部と岩手県支部はともに創立130周年の節目となる記念大会となりました。日赤名誉副総裁の寛仁親王妃信子殿下が、10月23日の群馬県赤十字大会、10月30日の東京都赤十字大会、11月8日に熊本で開催された九州八県赤十字大会にご臨席され、赤十字事業の推進やボランティア活動などに尽力された個人と団体を表彰されました。妃殿下は群馬県大会の式典後、新築移転した前橋赤十字病院をご訪問。地域医療、災害医療にさらなる貢献ができるように規模を拡張した新病院を視察されました。

11月2日の岩手県赤十字大会のほか、東京都赤十字大会でも平成30年北海道胆振東部地震における日赤の災害救護活動についても振り返る場面があり、自然災害の絶えない昨今、日赤の使命や存在意義を改めて確認する機会となりました。

また、九州八県赤十字大会にはステージ上に熊本県のPRキャラクター「くまモン」も登場。玉名女子高等学校による吹奏楽の演奏に合わせ体操を披露し、大会を盛り上げました。



壇上で功労者を表彰される寛仁親王妃信子殿下



くまモンは生徒たちといっしょに「くまモン体操」を披露

「知って良かった！健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター&ナースが教える 知って良かった！

健康豆知識



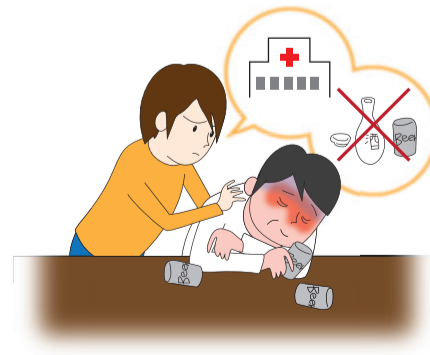
「アルコール依存症」～飲酒量が増える時期の心掛け

松江赤十字病院 精神神経科部長 室津和男 (むろつ かずお) 島根県松江市母衣町 200 TEL 0852-24-2111

忘年会や新年会などで飲み会が増える冬。年末年始の飲酒をきっかけに、朝でも昼でもなんらかの理由をつけて飲酒するようになると、アルコール依存症になることがあり、注意が必要です。アルコール依存症になると、肝臓病や糖尿病のリスクが高まるだけでなく、脳の萎縮が早まって現在の記憶をとどめられなくなる「アルコール性認知症」になる可能性も高まります。

厚生省によると1日の節度ある酒量は、ビールなら中瓶1本、日本酒なら1合が目安。しかし、実際には766万人の人がその3倍量のアルコールを毎日摂取、そのうちの440万人は、アルコール依存症や予備軍だといわれています。

休日にやることなく日中から飲酒してしまう人は要注意。アルコールが脳から理性を奪い、暴力やパワハラ、セクハラなどに発展しやすく、人間関係にも影響してしまいます。飲酒量が増えている自覚のある人は、まずは飲酒するタイミングを夜だけと決めて酒量をセーブすることから始めましょう。また、少量のお酒でも不安や孤独を埋めるように飲酒していると、次第に酒量が増えてしまいます。そのような傾向のある方は飲酒以外の楽しみを見つめましょう。飲む機会が多いこの時期、アルコールのリスクを認識した上で、飲めない人への配慮と深酒をさせないなどの気配りをし、楽しい時間を過ごせるといいですね。



アルコール依存症になると自分で決めた飲酒量を守れなくなるので、周囲の人が断酒会や医療機関の受診を勧めるなどのサポートをすることが大切です

file. 51

いま支援を必要としている人々がいる 「NHK 海外たすけあい」

日本赤十字社とNHKが共同で行っている「海外たすけあい」募金。1983年のスタートから、累計251億円の心温まるご支援を皆様からいただき、紛争・災害・病気で苦しむ人々のため、世界155の国と地域で使われてきました。

日本も震災で苦しい時は世界の国々から多くの支援を受けて来ました。海外とともに助け合う、そんな支援の気持ちをこのキャンペーンを通じて、世界の苦しんでいる人々へお届けします。

- ①あなたのご寄付を確実に届けます 「苦しんでいる人を救いたい」という共通理念を持つ、世界191の国と地域にある赤十字社の姉妹社と協力し、支援を確実に届けます。
- ②地域に根ざした継続的な支援をします 地域に根ざして活動しているからこそ、いち早く必要な支援を届けることができ、かつ継続して支援することができます。
- ③あらゆる地域に支援を届けます 各国に赤十字があり、中立の立場で活動しているからこそ、国際社会の支援が届きにくい地域にも支援を届けることができます。

ご協力方法

〒 郵便局・各金融機関
全国の郵便局、その他取り扱いのある金融機関で寄付できます。郵便振替(ゆうちょ銀行・郵便局) 口座番号: 00120-5-220 口座名義: 日本赤十字社(ニホンセキキョウジヤ)

インターネット
クレジットカードやPay-easyで寄付できます。 日赤 海外たすけあい 検索 特設サイトへ→

窓口
日本赤十字社の各都道府県支部、NHK放送局などから寄付できます。

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字 NEWS12月号を手にされた場所 (例/献血ルーム)
- ⑥12月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか? (いくつでも)

A. 表紙 B. 難民の命と健康を守る C. 赤十字の、ひと D. 原力災害救護訓練レポート E. みんなのボランティア F. エリアニュース G. 健康豆知識 H. プレゼント I. ワールドニュース J. 1枚の写真から

⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice(読者の声)への投稿もお待ちしております。

郵送/〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字 NEWS12月号プレゼント係 FAX / 03-6679-0785 メール / koho@jrc.or.jp (件名「赤十字 NEWS12月号プレゼント係」) 12月28日(金)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

present プレゼント

「NHK 海外たすけあい」の趣旨にご賛同された、日清食品ホールディングス株式会社より

チキンラーメン 1箱 (30食入り)

10名さまに

今年、チキンラーメンは60歳。世界初のインスタントラーメンとして誕生してから60周年のアニバーサリー！ (アレルゲン情報：小麦・乳成分・大豆・ごま・卵・鶏肉)

WORLD NEWS

インドネシア・スラウェシ島地震



インドネシア赤十字社の医療スタッフにアドバイスを杉本医師と苫米地看護師

現地医療チームと回る被災地

9月28日、インドネシアのスラウェシ島でマグニチュード7.5の巨大地震が発生。現地に派遣された緊急医療保健アドバイザーの3人が被災地の現状を報告。日赤は、長期的な視点を持って引き続き被災者の方々をサポートしていきます。

杉本憲治 医師
名古屋第二赤十字病院

村が丸ごと、完全に沈んでしまった

現地入りしてまず驚いたのは、村が1つ丸ごと沈んでしまっていたこと。津波が襲った海側ではなく、山側の地盤が液状化によって緩んでのみ込まれたそうです。

外国人は直接的な医療行為ができないため、私たちはアドバイザーという立場でした。クリニックを訪れない人＝出歩けないほどの重症者という可能性があり、そのような人を見落としてはならないと現地の医療チームに伝え、地元をよく知るボランティアの情報をもとに医療チームと巡回にあたりました。

日赤とインドネシア赤十字社は医療や防災の支援を通じた長い付き合い。今まで築きあげてきた信頼関係、そして同じような災害を経験している赤十字社であることから、緊急医療保健アドバイザーとして各国赤十字社の中で唯一、現地の医療チームに受け入れていただきました。

苫米地則子 看護師
日本赤十字社医療センター

患者の見落としを防ぐ民家の巡回は重要

精力的に活動している現地の看護師たちは私服姿でした。制服を着ないのか？と尋ねたら「家が崩壊していてナース服も取り出せない。家のことは全然手をつけられていない。けれど、今頑張らなくて、いつ頑張るの」と。支援している彼女たちもまた、被災者の一人でした。

また、インドネシアならではの事情として、伝統医療に対する民間信仰があげられます。民家を巡回しながら目の当たりにしたのは、負傷した箇所をなでる、呪文を唱える、といった行為で傷口が治癒するという信念を持つ人々の存在。伝統医療を信じる人は少数派ではなく、手術が必要な状態なのに放置され手遅れになりそうなケースも見受けられました。家を訪ねて被災者の方々の様子を実際に自分の目で確かめる、巡回の重要性を改めて実感しました。

五十嵐玲奈 企画係長
本社国際部企画課

心に抱える不安へのサポートも

小さな女の子のお母さんが「子どもが夜になると吐いてしまう」という悩みを打ち明けるなど、被災者の方々の心の傷は癒えていません。平成28年度に発生した熊本地震の時にも同様のことがありました。文化や言葉は違っても、災害が発生した際のこころのケアはもっともっと必要だと感じました。

巨大地震の震源に近い市街地では病院を含む多くの建物が倒壊した。地震に加えて津波と液状化による大規模な被害も確認されている。インドネシアでは外国人による医療行為が制限されているため、日赤ではいち早く職員を医療保健アドバイザーとして現地に派遣し、仮設診療所の設置・運営の支援を実施。今後もインドネシア赤十字社と相互協力のもと日赤は活動を続けていく。



ICRCが食料支援を行っているナイジェリアの学校に差す光 ©N.Tavakolian/Magnum Photos for ICRC

特別編

7枚の写真から
picture tells stories

「写真が持つ伝える力」で人道危機に光を

国際人道法の意義を広めるため、世界各地で紛争や戦闘により苦しんでいる人々の現状を伝える写真展を毎年12月に開催しています。今年は、アフリカのチャド湖周辺国(カメルーン、チャド、ナイジェリア、ニジェール)で激化した武力行為により、家族を失い、家を追われ、食料もなく、今日生きることもままならない生活を送る人々に焦点をあてました。世界的にメディア報道が少なく認知度も低いため、支援のための資金も不足しています。世界を代表する写真家グループ「マグナム・フォト」の写真家が捉えた40点を展示。ぜひご来場ください。

世界を知る写真展「ボイス・オブ・アフリカ」*入場無料
12月18日(火)～26日(水)11:00～19:00(初日は13:00～)
みなとみらいギャラリー (横浜市西区みなとみらい2-3-5)
主催: 日本赤十字社、赤十字国際委員会、キャノン株式会社